

——パンッ！！

小さな火球が木箱に立てた札を倒す音と共に、ネックは「よし！」と拳を握る。

「五連続！」

「……相変わらず、大したコントロールだよ」

近くで見ていたノランが口笛を吹いた。

「よくもまあ、そんなにポコポコ当てられるもんだよなあ」

「どうも」

ネックはへへと笑って札を立て直す。

「次外したら、お前の負けだぜ」

ノランは筋骨隆々の体を反らして、ばきばきと骨を鳴らした。ふーんと鼻息を噴き、土の地面に足で書いた線の前に立った。

家の中……窓を開け、裁縫をしながら二人の的当てを見ていたりアムが、大きな瞳を細めて楽しそうに二人を見守る。

「集中、集中……！」

三人の暮らす家の前の、小さな広場。

夜風が吹いて、数えきれないほどの星がまたたいた。火の魔法を入れたランタンが明るい。涼やかな虫の音と共に、穏やかな潮騒があった。

ここ最近、ネックとノランの間では、もっぱらの的当てがブームだ。赤い塗料で丸を書いた札を、離れたところから魔法で狙う。シンプルだが、これが意外にも面白い。腕を鈍らせないための訓練にもなる。

今日も最終ゲームに入ったが、またもネックが勝利目前だ。この一発を外してしまうと、明日の荷車引きを往路も復路もやらなければならない。しかも相手を乗せて……もっとも重労働なこの仕事は、賭けをしている二人にとってなんとしても避けたいところだ。

ノランは、手のひらを見つめて魔力を発した。

光の粒子がその手に集まり出す。

その光はやがて土色を持ち、ひとつの小さな塊となった。

ノランは「ふー」と深呼吸をして、「飛んでけ！ 土の矢！」

的に向けて、手のひらをパッと向けた。

まっすぐに飛んだ土の塊は、半分は木の札を掠り、もう半分は後方の森の木々の中に吸い込まれていった。ほどなく「どかん！」という地面が抉れる音がして、ノランは「ちくしょー！」とひっくり返った。

「気合い百点、パワー二百点、コントロールマイナス百点」

ネックは苦笑いを浮かべて、「今回は、放つ時に腕が右にぶれてた」

「ちゃんと的のデカさに合わせられたのによお！」

実はノランは、的当てで一度もネックに勝てたことがない。魔力の凝縮も照準も、そらネックほどうまくやられたら勝てるはずがないとノランは思う。

「明日も俺がひくのかよおお」

大の字になって星空を見ながら悔しそうにノランが呟くと、リアムが笑った。

「また次に勝てばいいんだよ」

「……つっても、俺はこいつに永遠に勝てねえんじゃねえか」

「ほら、元気出して。破けた腰布縫えたよ」

リアムが言うと、ノランはたちまち身を起こして、

「もうできたのかよ！ サンキュー！」

橙色の腰布をギュッと結んだノランに

「切り替えの早いやつだな」

前兆は一切なかった。

夜空で光が爆発したのは、ネックがそう言って笑った、その時だった。